猫蓑通信

第91号
平成25年
（2013年）
4月15日発行
（年4回発行）

連句の「間」

青木秀樹

先日、小さなホールで若手落語家の高座を聞いた。エール大学卒業、三井物産勤務の後、立川志の輔師匠に入門した変わり者で、その経歴と師匠の教えが厳しいことを枕として「道具屋」の一席を務めた。噺の筋も笑わせ所も巧みにこなしていたが、何か物足りない感じが残る一席であった。どうも噺を聞かせることに専心して、話の「間」や観客との「間」が十分でなかったことによるものだと後日思い至った。

落語は単なる話芸ではなく、顔の表情、手や腕や体を使い複数の人物を描きだす座芸ともいうべき芸である。小道具は扇子と手ぬぐいだけを使う。古典落語は何度も聞いて知っている噺でも、笑わせ所ではつい笑ってしまう。客が笑いたくて噺を聞きにくるともいえるが、笑わせるのは演者の芸である。

三遊亭円朝の創作した噺を知るには速記本が使われたが、今ではビデオやＤＶＤなどにより名人上手といわれた落語家の高座の映像をだれでも入手できる。これら名人上手の映像と、寄席に行きなまの高座を聞くのとはどこか違う。その違いは演者と観客との「間」ではないかと思う。名人と称えられた八代目桂文楽は高座への「出」から芸にしていたと言われる。能の翁を思わせる足取りで高座に上がり、先ず湯飲みを少し脇にずらす。これだけの「間」で観客の視線を集め、さあ噺を聞くぞという気分を客席に充満させた。この心の通い合いが映像では十分に伝わってこない。

連句は「座の文芸」と言われる。座についた何人かの人々が共同してひとつの作品を作り上げる。これが連句の座の形であり、連句の本質は捌と連衆同士が心を通わせることにある。私たちはいまに残る連歌や俳諧の作品を文字で読むことはできる。しかしその座の雰囲気やその時代の生活まではわからない。そこには書かれたものの限界がある。講注などで丁寧に解説されたものを読んで、ようやく付合いのおもしろさを知ることも多い。

ここまで「人間（じんかん）」の大事さを記したが、連句にはもうひとつ「句間」の問題がある。藤原定家が「疎句に名句あり」と言ったと伝えられているが、縁語で付けた連歌の時代とは芭蕉以来の付け方は大きく変化している。むしろ現代では疎句の弊害の方が大きくなっているのではないかと感じる。

付け所も付け心もわからない句が並ぶ作品が多すぎるように感じる。

『去来抄』の中の一節に「今の作者附る事を初心の業の様に覚へて、曾（かへつ）て不附（つかざる）句多し。聞人も又聞得（きこえ）ずと、人の云ん事を恥て、不附句をとがめず、却（かへつて）而能く附たる句を笑ふやから多し。」と。芭蕉在世中の蕉門にもあった現象が、現代にもあることをおもしろく感じる。これが連句という文芸固有の弊害であれば、付けと転じの基本をなお一層大切にして、心して連句に取り組まなければならないと思う。

●目次●

第百二十四回猫蓑例会・初懐紙作品　2
歌仙十巻
第二十一回岐阜県文芸祭連句部門受賞作　7
短歌行「中尊寺」　7
一字金輪仏頂尊　鈴木了斎
甘汁苦汁（第一回・附方）　8　根津芦丈
温故知新９：兵を形（いくさ）はすの極（あら）みは無形・孫子　10
蕉風俳論抄「山中問答」　11　立花北枝
事務局だより　12

第百二十四回例会初懐紙興行 一～四

一・松飾の座

歌仙「富士白し」　原田千町　捌

枯木立透かして富士の白さかな　千町
　ギターを鳴らし寒中の興　冬乃
母娘ペアールックの似合ひゐて　英雄
　角の茶店にいつも居る犬　碧
航空機静まる月の格納庫　アンズ
　牧を閉ざして交す挨拶　乃
ウ　秋祭笛の練習いつまでも　碧
　細くて長い指が自慢で　乃
あこがれは男勝りのサウスポー　ア
　出されずたまる恋文の束　碧
芥捨（ごみ）ては俺の仕事と心得て　英
　猫に見られるカラーステテコ　乃
血の如き満月昇る夏至の街　同
　縁台将棋団扇欠かせず　英
南洋へ移住の夢は退職後　ア
　インフレ政策景気好くなる　英
お隣に声かけ花に逢ひに行く　碧
　醤油きかせて栄螺壺焼　ア
ナオ　辨財天春の愁の面ざしに　乃
　西域の香ほのとただよふ　英
眠ってた脳にぴりりと電流が　ア
　ＭＲＩ異状なしとか　英
失踪の馬のめざせし雪の山　碧
寒の昴に愛を誓ひて　乃
好き好きとチェーンメールのぐるぐると　ア
　ダブルベッドへ誘へる罪　乃
手記の出て涙する人しない人　碧
　墓抱き起こす地震の故郷　乃
藁屋根を照らしてゐたりけふの月　英
　栗鼠もやまねも冬支度せる　ア
ナウ　しゃぶしゃぶになみなみ注ぐ新走　乃
　女子会に出る物の怪の影　英
六十年何をしたやらされたやら　碧
　セピア色して父母の肖像　乃
ワシントン花の都となりゐたり　町
　先行く人の肩に蝶々　ア
連衆　百武冬乃　鈴木英雄　松本碧
　松島アンズ

二・福藁の座

歌仙「雪明り」　本屋良子　捌

雪明り竹の回廊渡りけり　良子
　ふくら雀の休む蹲踞　霞
掛軸の水音かすか床の間に　ふみ
　鉢巻きりり若き板前　酔山
月の客自家用ヘリで到着す　弘佳
　足にすり寄る白秋の猫　み
ウ　そぞろ寒鞄の底の魔法瓶　弘
　綺麗な部下にちよつと優しく　山
恋文の数競ひ合ふバカな奴　み
巨人大鵬卵焼とふ　山
世の中を斜めに眺め勝組に　霞
　柱時計のすぐに遅れる　み
しづしづと祇園祭に月の添ひ　同
　新幹線で旨か冷酒　山
耳ざはり鼻にかかれるアナウンス　弘
　街を行き交ふ流行の服　霞
見得を切る五人男に花吹雪　山
　差入れにする名代草餅　弘
ナオ　夏近し古墳発掘進みたる　同
　謎めく文字を記す木簡　霞
刀剣の鍔は我家の宝物　み
　自衛隊員またも出動　山
トランペット夢と現をさまよひて　霞
　狐火借りて煙草くゆらす　弘
身を焦がし待ちゐる夜の訪問者　山
　占師には裏の貌あり　み
あの夫婦嘘を重ねて半世紀　霞
　残りものにもいささかの福　弘
望月のいま山の端に昇り初む　霞
　べい独楽まはす兄と弟　み
ナウ　落鮎を求めはるばる四万十へ　山
　恩師を囲み久闊を叙す　霞
口々に病気自慢で盛り上り　弘
　賽銭いつもほどほどの高　み
花の雲笈摺を脱ぐ満願寺　良
　琴の音聞ゆうらら裏路地　山
連衆　高塚霞　中村ふみ　吉田酔山
　松原弘佳

平成二十五年一月二十日
於　ホテルフロラシオン青山

三・飾竹の座

歌仙「歌かるた」　青木秀樹　捌

実らぬが恋と悟りし歌かるた　秀樹
白魚の手を握る初夢　徹心
水温む末は海へと続くらん　千惠子
新入社員高き靴音　和代
エレベーター朧の月と共に乗り　洋子
夜目を光らせ猫といふもの　千
ウ　胡粉おく画家の背中の丸まりて　代
鑑真慕ふ行列に付く　洋
休みにはあまた書物の点字訳　千
生き急ぐごと蜩の声　同
木に倚りて張り込み刑事（デカ）の仰ぐ月　代
柏鵬がゐたころの秋場所　心
昔から子どもの好きな玉子焼　千
錆の苦さも隠し味なり　洋
ちょい悪のイタリア人の深情け　同
女王陛下にディープキッスを　樹
故郷に花の便りの届きしか　代
焼菓子つくるうららけき朝　心
ナオ　連れ立ちて知恵授かりに知恵詣　千
微熱の起因ノロウイルスか　洋
ふかふかの布団いっぱい陽の温み　心
牡蠣割女皺の深々　千
わづかづつ形を変へる鍾乳洞　洋
兆の単位で国の借金　樹
維新とて命をかける人はなく　洋
ピエタの像を仰ぐ聖堂　代
あの方がけだものとなる夏の夜　同
胸の曲線なめてゆく月　千
濁り酒濁れるままにはらわたへ　樹
信濃の里のすすき野を行く　心
ナウ　山の名に太郎次郎の勢ぞろひ　千
合格祈願弥勒菩薩に　心
札止めの見世物小屋の最終日　洋
馬券の予想スマホ駆使して　心
暁に散り行く花の静々と　樹
清流の音包む軟東風　洋

連衆　佐藤徹心　鈴木千惠子　長崎和代
大島洋子

四・年木の座

歌仙「木呪（きまじない）」　杉山壽子　捌

父と子の福の声する木呪　壽子
小豆の粥も煮え上がる頃　暁巳
姿見に帯の具合をたしかめて　美奈子
テレビ画面は世界遺産を　末悠
月照らす地球の半分夜となる　敦子
雁渡りゆく山の頂　巳
ウ　ハロウィーン妖精めいて跳ね回り　奈
街角で会ふ初恋の人　悠
誘はれてよるのぎをんへお食事に　敦
瀬音床しき寺町の宿　巳
地獄とふ地熱利用の村ありて　壽
環境保護を褒められもする　敦
冷汗が出ますと顔はうれしさう　奈
蝉が生まれて月がのぼつた　巳
はね橋をくぐれば速度増す小舟　悠
助動詞一つ変へてみやうか　敦
鼻母音を効かせシャンソン花の宵　奈
ママンとマシュマロ食べるうららか　巳
ナオ　小町忌に小さき紅筆贈りたる　奈
さざなみ立てる庭の蹲踞　巳
シーラカンスのそり動いて海の底　悠
勲章まではと辞めぬ会長　奈
諸の香にひとが集まる落葉焚き　敦
疎開児童の記憶凍てつく　奈
こはごはと五右衛門風呂に入りたる　悠
まさか君までマクド難民　同
ゆるキャラのバイト仲間は睦まじく　巳
終末婚といふ幸せが　敦
月の影未来を覗く眼鏡欲し　悠
とんばう背なに牧の乳牛　壽
ナウ　地芝居の宣伝カーは夢流す　巳
カップ酒持ち単線の駅　悠
卒寿にて血圧計るが趣味となり　奈
いつもの路を犬と散策　敦
花の風天へ吹きあげ吹きあげて　壽
ひらひらさせる春のスカーフ　敦

連衆　島村暁巳　鈴木美奈子　棚町末悠
武井敦子

第百二十四回例会初懐紙興行 五～八

五・輪飾の座

歌仙「大神楽」　高橋豊美　捌

旅に出ん舞初め終へし大神楽　豊美
　雑煮の汁の残る塗り椀　恭子
夜明けから早蕨たんと洗ひゐて　美代子
　東の空に仰ぐ淡月　富子
新社長挨拶長き入社式　志世子
　テストカー駆る名ドライバー　豊
ウ 高原へチーズ工房尋ねゆき　世
　碧い眼の娘と暮らす路地裏　恭
太ももの下着の跡が魅力だね　富
　悦楽つづるブログ炎上　代
お料理のレシピ考案百品種　豊
　見回るだけの短日の畑　世
雪囲ひ作る父子に月明り　恭
　枯木の蛙生贄のまま　富
庶民にはデフレインフレどれが得　代
　楽じやあないよ御用学者も　豊
浮かれゐる万朶の花に唄も出て　世
　お城の堀に注ぐ春水　恭
ナオ うぐひすの姿をちこち見え隠れ　富
　ジャンバルジャンは逃れ逃れて　代
無罪かな有罪かなと審査官　豊
　祈りを込めて父母の声　世
ベランダに置かれたままの三輪車　恭
野菜畑に向日葵の咲く　富
彫刻家不倫の彼と仮住まひ　代
　アポロの如き厚き胸板　豊
つまらない口説き文句も夢の中　世
　天眼鏡で探す幸せ　恭
盃のまんまる月をひと飲みに　代
　掃除嫌ひが鯊釣りに行く　富
ナウ 秋の蚊につきまとはれし寺の裏　豊
　しり取り遊びきりもなき児ら　世
漫画本積んでしまって五十年　恭
　片付け上手で暮らし上手で　富
晴れた日の花輝きぬ古希の山　豊
　文運ぶ鳩のどかなる午後　代

連衆　式田恭子　山田美代子　名古屋富子
　秋山志世子

六・蓬莱の座

歌仙「初富士や」　小池啓子　捌

初富士や遙かに浮かぶ綿帽子　啓子
　裳裾濡らして鶏日の海　要子
雛飾る土間の框も磨かれて　孝子
　柱時計はのどらかに鳴る　泉子
モノレール朧の月を運び行き　健
　上司の印を貰ふ企画書　孝
ウ はねあがる株価に一喜一憂し　要
　ベリーダンスのおへそかはゆく　健
ロングヘアプライベートを包むらん　孝
元担任が今の夫で　同
道端についと気になる含羞草　泉
　ラムネの泡のしゅわと飛び出す　健
盆の月バイクの僧が駆け抜けて　泉
　かかしに服を着せる大黒　要
柿干して茜に染まる関ヶ原　孝
　尻尾の先で返事する猫　要
小面の愁ひのしばし花霞　孝
　紙風船にゆるキャラを描き　泉
ナオ 野に畑にミソラソラシド揚雲雀　健
　はらいそ願ふ島の賛美歌　孝
駐在員火を噴く銃を悲しみて　同
　遮光カーテンぐるり巡らす　要
雲梯を寒猿渡る遊園地　泉
　鬼やらひには爺が活躍　同
みちのくのお嬶の閨を狙ふ影　孝
　叫んでしまふ彼のひとの名を　健
カクテルのピンクレディーは甘過ぎて　孝
　とりだめ録画早送りする　要
一瞬はふくらみ昇る望の月　同
　風に吹かれて糸瓜ぶらぶら　健
ナウ 漂泊の旅も終はるか秋深み　孝
　新米ですよ寮の食卓　啓
代返のをのこかそけき声出して　要
　縦書きよりも横文字が好き　泉
おほかたの花散るころの八重桜　啓
　翅をぴたりと合はす蝶々　健

連衆　山本要子　坂本孝子　青木泉子
　由井　健

七・御鏡の座

歌仙「初心の一矢」　内田遊民　捌

風を射る初心の一矢弓始　遊民
　静寂の中に揺れる繭玉　有子
窓越しのヘアーサロンは賑はひて　鐵男
　愛猫自慢とめどなくする　淳子
何を語らん名月の輝きに　曜子
　トランペットの響く長き夜　有
ウ　地芝居の蓆に吾子は深眠り　淳
　ふっくらほっぺ食べていいかな　有
嫌ひですか少し遅れるその返事　淳
　アラブの皇女憂愁の翳　男
人質の安否確認錯綜し　淳
　操縦室の見える飛行機　有
摩天楼ビール片手に仰ぐ月　同
　海辺に並ぶかき氷売り　曜
賭将棋やはりあいつと疎まれて　男
　頼んだ出前威勢よく来る　淳
省内は予算合ひたる花の庭　男
　大掃除してどれもすっきり　有
ナオ　春炬燵抜け出た穴のそのままに　淳
　野麦峠を越える人影　男
会へばすぐ飯食ったかと母は問ひ　淳
　いつも手箱に按摩膏あり　有
愚痴を入れ恨みも入れて鮟鱇切る　男

平成二十五年一月十二十日
於　ホテルフロラシオン青山

聞えよがしに経を読む尼　同
昼と夜男二人の妻として　有
　女形にて困る口髭　曜
万雷の拍手を浴びるチラリズム　男
　かたかたかたと揺れる枝折戸　有
山の端を染めて月代ほんのりと　淳
　並ぶかかしの顔は親父似　曜
ナウ　能面の裏を覗ける世阿弥の忌　有
　鎮守の杜に鴉群れ飛ぶ　淳
ひと息にバイクふかして登り坂　曜
　未来を望む少年の夢　淳
花数多巡りし宿の露天の湯　民
　晩霜の野を移る明星　男

連衆　佐々木有子　林　鐵男　上月淳子
　前田曜子

八・裏白の座

歌仙「自分探し」　高山鄭和　捌

新しき自分探しに初懐紙　鄭和
　蓑笠要らぬ年始めなり　路子
コクピット副操縦士身構へて　美恵
　砂漠の丘は様々の貌　一枝
没り陽見て月の出を見てただ独り　昭
　夜来香には碁敵も寄る　恵
ウ　秋暑し楯とか矛とか仕舞ふ室　枝
　角を隠してけふの花嫁　路
かあちやんの話になるとやにさがり　枝
ダックスフントの咿へ来るメモ　恵
外交の機密文書を懐に　枝
　松井秀樹は未だ米国　昭
繊月を射んと草矢を飛ばす子ら　恵
　ちりりりりんと軒の風鈴　路
ママチャリの手信号して曲がる角　枝
　いやなやつほどじやまをしやがる　和
梅が香を纏ひて友と女坂　路
　雪間の礎石勅願寺跡　昭
ナオ　三・一一帝は膝を折り給ふ　路
　窓を開ければ海平らなり　和
珈琲の袋にヤクを忍ばせて　枝
　またも不満な相棒の役　恵
管楽の破で始まつてしまふ曲　枝
　ポップコーンの手が止まらない　恵
どうせならあなたの風邪をもらひませう　同
　朴念仁はとんと気づかず　和
ばち当たり産土の巫女かつさらひ　恵
　源氏はいまだ桐壷の巻　同
宴果てし田の字の部屋に月の射す　枝
　同じ苗字の墓にはぜの実　恵
ナウ　赤い羽根銀貨を入るる音のして　路
　とにもかくにも合はす辻褄　同
鯨尺曲尺もあり竹の差し　恵
　宅配食は味の勝負に　昭
花霏霏と身に降りかかる鎮海府　和
　散歩途中で拾ふ紅貝　昭

連衆　倉本路子　山口美恵　西田一枝
　松原　昭

第百二十四回例会初懐紙興行 九～十

九・穂俵の座

歌仙「歌かるた」　野口明子　捌

歌かるた好きな札から並べけり　明子
　屠蘇にほんのり染まる横顔　了斎
通販のバーチャル試着とりどりに　久美子
　小型犬ほど誰にでも吠え　泉美
己が身に野性目覚むる月の影　斎
　おしろい花の匂ひ甘くて　久
ウ
をどる手の昨日の熱をおもひ出す　斎
　思慕をするりとかはす貴婦人　泉
打ち上げの実はミサイル金正恩　久
　中古で揃ふ猫脚の家具　泉
就活に過大な夢は持ちません　斎
　草食男子料理お得意　久
烏賊釣の舟の孤独の灯の数多　斎
　月の岬に白南風が来る　泉
トラックで女剣劇旅廻り　久
　母が下ろしてくれた肩揚げ　斎
花はわが故郷を飾る山桜　同
　鬼の攪乱春の風邪引く　久
ナオ
青帝をスカイツリーが突つく街　斎
　ライトアップは淡き紫　久
杖ついて家族写真の真ん中に　泉
　それぞれ描くしあはせの地図　同
鯨よりもっと遠くに竜が棲む　斎
神より速き京の計算　久
　先生は恋に疎くて独り身と　泉
　中学三年まだだめですか　斎
憧れはMとSとがちょっぴりと　久
　洗ひざらしのデニムくたくた　泉
探鳥のガイド指差す月の下　久
　はちみつ漬けの生姜忘れず　泉
ナウ
冬隣内装展示模様替　同
　両界曼荼羅描いた油絵　斎
被災地のバスは何処でも止まります　久
　スマートフォンで知らす近況　同
新しき鞄に入る飛花落花　明
　うっかり放す小さき風船　泉

連衆　鈴木了斎　副島久美子　金子泉美

十・飾炭の座

歌仙「初芝居」　平林香織　捌

幸あれと睨む弁慶初芝居　香織
　淑気満ち満つ賑はひの小屋　文子
土匂ふ蛇体把手の鉢掘りて　文伸
　水温む頃山峡を行く　雅子
月朧端座し筆を運ぶらむ　文
　展覧会に並ぶ人々　織
ウ
おばんざい小さな店をオープンし　雅
　トレードマークコロボックルです　伸
何もかもお揃ひにする若夫婦　織
　二部合唱で歌ふ恋唄　文
夏衣スポットライト浴びて脱ぎ　伸
　深紅の薔薇の返す月光　文
欧羅巴古城巡りの御一行　同
　身振り片言総動員す　織
震災の復興未だままならず　雅
　お助け橋をわたる猫あり　伸
決勝戦ラリー続いて花吹雪　織
　十三詣の少女写メール　文
ナオ
故郷は懐かし祖母の春炬燵　伸
　肥後守あり引き出しの中　雅
インフレに賛否両論新政権　文
　盥回しの急患を診る　織
熱燗を欲しひと肌も欲しくなり　雅
　砕氷船の帰港待ちわぶ　伸
かの君と夢の褥を終夜　織
　何を告ぐるか嗚呼と鳴く鳥　文
旧制の高校今は記念館　伸
　サインはいつも髭文字でする　雅
眉の月螺鈿の貝を細工して　同
　炭焼さんま塩だけで食ふ　織
ナウ
運動会鼓笛の撥の軽やかに　雅
　ツインテールの揺れる踊子　伸
アンティーク時計のねじを巻き忘れ　織
　琥珀の中に眠る思ひ出　文
花の窓西の山脈紫に　伸
　耕しの人憩ふ畦道　雅

連衆　橘　文子　若林文伸　武井雅子

平成二十五年一月二十日
於　ホテルフロラシオン青山

第二十一回岐阜県文芸祭連句部門受賞作

岐阜県主催の平成二十四年度岐阜県文芸祭の連句部門にて、猫蓑会員の鈴木了斎捌きの作品が「秀作賞」を受賞しました。

秀作賞

短歌行「中尊寺」　鈴木了斎　捌

鯛と交はす謡や中尊寺　鈴木了斎
月のかけらを包む白露　式田恭子
革鞄爽涼の座に置かれゐて　斎
眼鏡のふちに入れるイニシャル　恭
ウ　犬の名は三郎ですと挨拶し　斎
風来坊の夫はどこやら　恭
汝が笑みに似て梅咲くといふ便り　斎
橋のたもとに残る堅雪　恭
振り向きもせずに鶴去る北の海　斎
レンタサイクル列を連ねて　恭
鎮魂に仰ぐ満天大花火　斎
白き絣の裾をもちあげ　恭
ナオ　名将と呼ばるるひとの寡黙なり　同
衆院選に出ろと甘言　斎
過疎の村二時間ごとのバスが行く　恭
綿虫の群たちまちに散り　斎
納豆の糸巻いてやる世話女房　恭
みな手の内にある閨の癖　斎
腕枕角度を変へて月見よと　同
音もたてずに落ちる団栗　恭
ナウ　文庫本酒とからすみ傍らに　同
遠き故郷へ帰りなんいざ　斎
悠々と古城を浮かべ花霞　恭
風と水とが光るひねもす　執筆

平成二十四年八月十五日　首尾　於　東北新幹線車中

一字金輪仏頂尊（いちじこんりんぶっちょうそん）

鈴木了斎

例年八月なかばに、平泉中尊寺再奥部の白山神社能舞台で、中尊寺喜多流を中心とする夜能が行われる。一昨年は大震災と原発事故のため中止されたので、昨年八月は二年ぶりの開催だった。中尊寺喜多流当主の佐々木宗生シテによる「誓願寺」のあと、野村万作、万斎、遼太という豪華キャストによる狂言「二人袴」、そして辺りが薄暗くなり、篝火が点火された後、宗生氏の子息佐々木多門シテによる「養老」。

「養老」は、第二十一代雄略天皇の御代という時代設定で、美濃山中での霊泉の発見を言祝ぐ能。発見者の樵（きこり）の親子と、都から検分に訪れた勅使との滝壺を前にしたやりとりの後、吉兆とともに山神が現れ、天下太平を祝福してひとしきり舞い、そして消える。多くの能と同じく、筋立てはとてもシンプルだ。

筋立てだけでなく、能の舞もシンプルで、簡単に言えば、ごく限られた種類の、それぞれシンプルな所作を組合せ、繰り返すだけだ。

それなのに、というより、それだからこそか、平凡な演技と名演の差が明らかなのは何故だろう。能を習っているわけでも、さほど観能の経験を積んでいるわけでもないのでよくわからない。しかし「違いのわからない」観客である私から見ても、その日の山神の舞は確かに名演だったと思う。時間も場所も忘れてその世界に惹き込まれ、浸り切ってしまった。終わったときはまさに、我に返る、という感じ。ああいうのを入魂の演技というのだろうか。

この山神は、楊柳観音菩薩の化身という設定だ。三十三通りに姿を変えるという観音菩薩の、第一の応身が楊柳観音で、薬王菩薩とも呼ばれる。手にした楊柳の小枝から霊水を撒き、悪疫を祓い病を退ける。震災と放射能禍で一年休止した後の復活の演目にこれが選ばれた理由がわかるような気がする。だからこそ「場の力」が働き、舞台と観客が一体化したかのような希有の名演が実現したのかもしれない。

ちょうどこの時期、中尊寺では光堂の背後で、藤原氏第三代秀衡の持仏だったという「一字金輪仏頂尊」という秘仏が公開されていた。なんとも美しい、そして西国の仏様たちとはまったく違う、陸奥（みちのく）独自の美的、宗教的文脈を感じさせる仏様だ。華やかに彩色されたお顔は、棟方志功の板画（はんが）や、こけし人形の顔立ちを連想させ

る。彩色されながらも木肌が感じられて、こけし人形や「おしらさま」などの樹木信仰とのつながりを思わせる。この秘仏も、東日本復興を祈願して公開されたのだそうだ。この仏様に魅入られた感覚は、山神の舞に魅入られた感覚とつながる気がする。素顔の佐々木多門氏を知っているが、そういえば、やはりこの仏様とどこか似た、生粋の東北人の面差しなのだった。

光堂から誰か来てゐる夜能かな　了斎

山神のくるり回れば初嵐　同

甘汁苦汁（第一回・附方について）

根津芦丈

昭和三十九（一九六四）年一月二十日刊「山襖」創刊号より転載

かつて故伊東月草さんが、連句をやりたいとのことで上京した。其時、月草さん曰く、連句の附味が判らぬと云うから、二章体の俳句の附と同じである、二章体の俳句は、殆どが小さい連句であると思えばよろしい。と答えたら、アツそうか、と云つてうなづいた。二句間のことはそれでよいが、三句めの転じ、四句五句と附け進めて行くに就いては、制約があるがむづかしいものではない。要するに歌仙なら三十六句、三十六歩で、一歩も後へ戻らぬ。二花三月と云つて、花が二度、月が三度の定座がある。外は同じもの、同じ言葉を再び云はぬと、心得て居ればよろしい。数限りもなくある、制約の書など見る必要はない。渋滞なく転して行けばよい。之れに就て。

俳諧は障子の引手峰の松火打袋に鶯の声[編注※1]とも云はれて居る。障子をあけた、峰の松が見える。一服吸わんと火打袋をとり出す、鶯の声が聞こえて来る。少しの渋滞もなく次々とすすんで行く。こんな話をした後に九時頃から、秋風の句を起して、話し話し運んで午後四時に満尾した。午の食事をしたりしたから五時間そこそこかかつた。此程度の時間があれば一巻の歌仙ができる。

此忙しい世の中に、あんな長たらしいものをと云われるが。それは喰はず嫌いの人の逃口上である。現に松本の信大の連句会では、毎月第二日曜日に開会しておりますが、十一時に始めて四時には必ず一巻満尾しております。

芭蕉は、附味に附運びに就て、昔とか、いにしえ又は句は昔ならねど、などの言葉がよく出ます。蕉風と昔とどんな違いがあるか。

杉戸開ければ匂ふ梅が香。

といふ前句に。

貞徳派　鶯の哥のなかだち尋ね来て。

と附ける。

談林派　春の夜の闇はあやなし手水凍。

と附ける。

蕉風　薄霞箒はなさぬ朝朗。

と附ける。

貞徳派では、梅に鶯、戸を開けるに、友が尋ね来ると云ふだけの事である。談林では、春はあやなし云々の、新古今？　かにある古歌どりである[編注※2]。時鳥来べき宵なり頭痛持。などのように古事や古語等を持出して博識ぶりを示す処が、自慢の山である。二派とも理智を辿つて、自他の移り変りなど、いつこうにお構いなしである。之に反して蕉風では、何の係りもなく、自然にあるがままを附ける。昔と云い、句は昔ならねど、と云うのは右の二派をさすのである。

猶私に云はせれば。

霞々と箒はなさぬ朝朗

とはつきりした「他」の句にすれば、杉戸開けるの「自」の句に他の向い合せで、自他の移り変りがよくなるが。

蕉風は、無心所着にて、理屈を云はず、理を追わず、其の続きを云わず、根を切ることである。附方には、種々の名目はあれども、煎じつめれば、匂いの一字につきる。匂いの芸術である。

意の一貫せぬものは、文学にあらずとなし、附合非文学の説をかたく信じて居る者、殊に子規崇拝者は、大部分の人が之に属す。意の一貫せぬものは、文学に非らずとなさば、二章体の俳句は、如何。

ほうれん草のしたし冷たし囀れる

連句の附味そのままの佳句である。此句上五七に対し、下五は殆んど別の事柄である。更に意の一貫せし処なし。元禄の昔より発句は取合せものなりと、云つて今日に至る。此類の二章体の句にて充たされて居る。之れ等を皆非文

学と云ふか。笑ふべし。

又古来こんなことも云はれている。

俳諧（連句）は、茄子漬の如し、つき過ぎれば酢し、つかざれば生なり、つくとつかざる処に味あり。と。又、はんかい※3怒つて、妖竜をまねき、楊貴妃笑つて、鉄門を砕く。

之れ等は、意表外のはたらきをなすことを云つたのである。

芭蕉は制約と云うもの作らぬ。自由であるべき俳諧を束縛するからと云つて居られる。自由といつても野放ではない。芭蕉の心法を窺ふことの出来る第一の書に「山中問答」がある。次に「三草紙」之は遺語を集めたものである。此二書を主として、蕉風のある処を悟るべきである。又此山中問答の付録に「八方自他伝」がある。此書は、蕉風に尤大切なる、自他の移りかわりの基礎となることを教えたるものであるから、知つておくべきである。但し真行草のうちの真の部であるから、行、草の俳諧の出来る様になれば此の外へいくらでも出られることを附け加えておく。

其中の一、二を示せば。

並木あらはに松の露ちる　　場

入る月に痩児抱いたる物もらひ　　他

此前句に

脇ひらも見ぬ鍛冶が勢ひ　　他

かように他の句に他の句を向はせて附けたる時は、見て居る人は別にあると知るべし。

顔にみだるる髪の赤かれ　　あしらひ

（丈曰　物貰の風貌である）

又

聖霊送る朝のせはしさ　　自

之は物貰を見て居る人の、自の句である。

前句物貰に対し、附方を三通りに示したものである。就中、鍛冶が勢ひの附句の味は、類例の少なき素晴らしいものである。

又

落瓦あらしは松に静まつて　　場

皆忘れたる明方の夢　　自

抱籠の手ざはりもはや秋近き　　自

又こうも附く

看病のかゆふきさます小暗がり　　他

又かように、人情なき句へ自の句附けたる時は、其人の自の句を附ける共、別に人を出して、附けるかするべし。

貞徳派や談林派と違つて蕉風では、自でも他でも同じものの三句並ぶことを嫌ふ。生類でも植物でも山類水辺、其他三句並んでよいものはない。それは変化せぬからである。以上は真行草のうちの「真」の附け運びであつて、行草になると、三句並ぶ場合があるが、それは蕉風にて云う「心法」によるものである。心法については越人の註解、何丸の大鏡、曲斎の婆心録、幸田露伴の冬の日抄等の誤解、悪解を訂す時に詳にします。

三八・一二・一

※編注1：ここに「我恋は障子の引手峰の松火打袋に鶯の声　清巌茶話（正徹）」と、故東明雅先生手跡の万年筆による書き込みあり（テキストは東家からご貸与いただいたもの）。室町中期の禅僧正徹（別号清巌）の歌論書「正徹物語」の前半を「徹書記物語」、後半を「清巌茶話」と別称する。後者に無心所着歌の例としてあげられているこの歌の元の出典は、六条家に伝わる歌論書「六条家秘抄」で、初歩の歌から高度な歌まで四段階に分けた第四の最高位の歌の例として上げられ「是ハ佛菩薩も、うかがい得ぬ躰也。されとも恋の哥にハ深心の風なり」とされる。無心所着歌とは意味ではなく感覚的な関連だけで一首を構成する疎句の歌の究極のもの。この歌の上の句初五を除いた「障子の引手峰の松火打袋に鶯の声」が、付句の距離感の手本として俳諧師の間に伝わっている。引手を引いて障子を開けたという内容の句に、そこで目の前に見える庭石を詠んだ句を付けては近すぎで、目を上げて遠くに見える峰の松を詠むくらいがちょうどよく、峰の松を詠んだら、その下に座って火打袋を繙き、煙草を一服するところに想像を飛躍させ、さらにその次には、その周りでは鶯が囀っているだろう、というふうに、次々にイメージを展開せよ、ということ。物語的な筋書や原因結果の連鎖ではなく、感覚的、直感的な連想「匂い」でこれを繋げ、展開して行くことが大切だ。

※編注2：実際は古今集41の凡河内躬恒の歌、「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」を下敷きにしている。

※編注3：「はんかい」は古代中国の武将、樊噲。漢の高祖、劉邦の部下として多くの武功を立てた。劉邦の絶体絶命の危機を救った「鴻門の会」のエピソードなどが有名。

温故知新

9：兵を形はすの極みは無形

●形に無窮に応ず
孫子　第六章「虚実編」
紀元前五百年前後

・白文

形兵之極、至於无形。无形、則深間弗能窺也。智者弗能謀也。因形而錯勝於衆、衆不能知。人皆知我制形、所以勝者不可知。故其戦勝不復、而応形於無窮。

夫兵形象水。水行避高而走下。兵勝実撃虚。故水因地而制行、兵因敵而制勝。兵无成勢、无恒形。能與敵化、之謂神。五行无恒勝、四時无常位、日有短長、月有死生。（漢字は原則として新書体に改変・以下同）

・読み下し

兵を形すの極みは、无形に至る。无形なれば、則ち深間も窺うこと能わざるなり。智者も謀ること能わざるなり。形に因りて勝を衆に錯くも、衆は知ること能わず。人は皆な我が制形を知るも、勝つ所以の者は知る可からず。故に其の戦い勝つや復さずして、形に無窮に応ず。

夫れ兵の形は水に象る。水の行は高きを避けて下きに走る。兵の勝は実を避けて虚を撃つ。故に水は地に因りて行を制し、兵は敵に因りて勝を制す。兵に成勢无く、恒形无し。能く敵に与いて化するは、之れを神と謂う。五行に恒勝无く、四時に常位无く、日に短長有り、月に死生有り。

・現代語訳（講談社現代文庫『孫子』浅野裕一による）

軍の態勢を現わす極致は、無形に到達することである。無形であれば、味方の陣営奥深く潜入した間諜も、自軍の態勢を読み取ることができない。知恵者も自軍の態勢を推し測ることができない。敵軍の態勢に応じて、優勢な敵に勝利する形態をあらかじめ措定するのだが、優勢な敵はそれに気づくことができない。敵人はみな自軍が最終的に勝利を制した時点での態勢を知りはするが、勝利を事前に決定した原因は知ることができない。こうしたわけだから、その勝利する型には二度と反復がなく、どこまでも敵の態勢に無限に対応してゆくのである。

そもそも軍の形は水を模範とする。水の運行は高い場所を避けて低い場所へと走る。同じように軍も、敵の兵力が優勢な実の地点を回避し、敵の備えが手薄な虚の地点を攻撃して勝利する。だから水は地形に従って運行を決定し、軍は敵の態勢に従って勝利を決定する。軍にはできあがった一定の勢いというものはなく、決まりきった固定した形というものもない。うまく敵軍の態勢に従って変化することこそ、これを神妙と称するのである。木・火・土・金・水の五行にも常に勝つものはなく、春・夏・秋・冬の四季にもいつまでも居座るものがなく、太陽の輝く昼間にも短い長いの推移があり、月にも欠けたり満ちたりの変化があるではないか。

解題

●1・孫子の思想と古代、現代●詩歌について考えるにあたって、軍事論などを引き合いに出すことは、無粋のきわみと思われるかもしれない。なにしろ「紅旗征戎はわがことにあらず（藤原定家）」「戦争と俳句は無関係（高浜虚子）」というのが日本の詩歌では標準的な物の見方だ。

しかし、紀元前五百年前後という時代は、現代までつながるような深い思索が、孔子などの中国だけに限らず、インドのゴータマ・ブッダなど、世界のあちこちで同時多発的に登場した時代だ。孫子の思想も、軍事論という形をとりつつ、人間の思考、行為（特に集団的行為）の深いところを突いて、今日読んでも新鮮さを失わず、様々な事柄を考えるにあたって、多くのヒントを与えてくれる根源的な内容を含んでいる。

もともと戦争は、人間の社会的営為の最も凝縮された表現のひとつ、という側面を持っている。戦争についての考察は、軍事にとどまらず、人間の営為一般についての考察にも応用できることが多い。

主としてヨーロッパで発展した近世、近代の兵学は、近現代の国際政治状況、兵器その他の軍事技術を前提に、枠組みを限定されたものになっている。だが孫子の思想は、当然ながらそうした限定からも自由で、はるかに応用範囲が広く射程が長い。

近代的総力戦の時代が既に終わり、国と国の抗争にも情報戦、ゲリラ戦など多様で不定型な要素が増えている現代では、戦争という複雑で多層的な事

象にどう対処するかということを、単なる戦闘技術に限らず、その根本から追求した孫子の思想が、実際的な軍事思想としても再評価される機運にあるようだ。

ビジネスに関連して、戦略、戦術といった軍事用語や、概念の枠組みをメタファーとして考えたり語ったりするのはよくあることだし、好悪は別としてわかりやすい応用例だ。しかし孫子の思考はそうした功利的な事柄だけに止まらず、人間の美的創作活動といった、一見戦争とは無縁の平和的な事柄についても十分参考にできる内容を持っている。ましてやそれが集団的創造行為となればなおさらだ。

●2・「無形」と俳諧●孫子が軍事の極意として語るのは「無形」ということだ。「無形」とは一つの形や関係に固着することなく、常に臨機応変に自らを革新し、いつでも状況に最適化することができる柔軟な状態を維持すること。

「その勝利する型には二度と反復がなく、どこまでも敵の態勢に無限に対応してゆく」「軍にはできあがった一定の勢いというものはなく、決まりきった固定した形というものもない」「春・夏・秋・冬の四季にもいつまでも居座るものがなく……月にも欠けたり満ちたりの変化があるではないか」などの孫子の文言は、「新しみは俳諧の華」「たとへば歌仙は三十六歩なり、一歩も後に帰る心なし。ゆくにしたがひ心の改まるは、ただ先へ行く心なればなり」「風雅におけるもの造化にしたがひて四時（四季）を友とす。見る処花にあらずといふ事なし、おもふ所月にあらずといふ事なし」などの芭蕉の文言とも共振共鳴するようだ。

芭蕉も元々は武家の環境に身を置いていたわけだから、その基礎教養の一端に「孫子」も含まれていて、これらの文言にその残響が現れている、というような可能性もなきにしもあらずだ。しかしそこまで考えなくても、人間の営為に深く思いを沈めれば、似たような思考、表現に至る、という理解でも十分だろう。

孫子にしても芭蕉にしてもこれらはいわば「極意」だからやや抽象的だが、「極意」にこのような共通性がある以上、「孫子」の個別の具体論の中にも、連句実践を考える上で思わぬ参考になるようなことが数多くちりばめられている。俳諧人が一読して決して損はないだろう。連句を捌く、ということには、人の集団の営為をどうリードして行くか、ということが当然に含まれるが、第八章「九変編」が扱う「将」たるものの心得なども、これについて示唆するものが非常に多い。

●3・講談社学術文庫『孫子』浅野裕一著●「孫子」の和訳・解説書は何種類も出ているが、最も古い前漢時代の竹簡を底本にしているのはこれだけ。現代語訳に著者の解釈が入りすぎているという意見もあるが、むしろ奥深い孫子の記述に奥深く同行しようという志を感じさせる。オリジナルの白文と読み下し文も掲載されているのだから、疑義を感じる箇所があれば、それらを熟読して確かめればよいことだろう。条項ごとの解説や巻末の総合解説が周到であること、解説の文章そのものがわかりやすく、かつ味わい深く魅力的であることにも定評がある。「温故知新」シリーズではじめて、現代語訳にも浅野氏のものをそのまま引用させていただいた。

「孫子」そのものが、傾聴すべき名言の目白押しに詰まっている書だが、浅野氏独自の解説文にも、含蓄に富み、味読に値する名言が多い。「……人間は必ずしも他人の部下になることを嫌いはしない。ただ、信頼できない主人に仕えるのを嫌うだけである」（第九章「行軍編」末尾）など。（斎）

蕉風俳論抄『山中問答』（立花北枝）より

（前略）

一、俳諧の道理にあそぶ人は俳諧を転ず。俳諧理屈に迷ふ人は、転ぜず。世に上手下手の論のみして、俳諧と言ふ道の所以をしらず。蕉翁は、正風の虚実に志深き人を、我が門の高弟也と誉玉ひき。

（中略）

一、俳道は道学の花と見て、智を捨て愚にあそぶべしとぞ。

一、俳諧の姿は、俗談平話ながら、俗にして俗にあらず。平話にして平話にあらず。その境を知るべし。此境は初心に及ばずとぞ。

一、世人俳諧をくるしみて、俳諧のたのしみを知らず。趣向を定むるに心得有。工夫は平生に有。席にのぞみては無分別なるべし。

（中略）

発句は大将の位なくしては、巻頭にたらず。平句は士卒の働きなくては、鈍にして役にたたず。先この心得第一の事也。

（中略）

一巻の変化を第一として滞らず、新しみを心がくべし。妙句の古きよりは、あしき句の新らしきを俳諧の第一とす。

一、句文に風雅と言事忘れるべからず。さび、しをり、細み、しほらしきといふは風雅なり。この心がけなければ、或は平話の句はただ事となり、或は無骨、或は野鄙に心賤しく、又、道理に落ちて、俳諧連歌の本意を失ふ事、道において甚、大切のことならん。（後略）

事務局だより

●第百二十四回例会（平成二十五年初懐紙）が開催されました

一月二十日（日曜日）、ホテルフロラシオン青山にて、本年の初懐紙が開催されました。十卓に分かれて歌仙を興行し、全席披講のち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙十巻は、今号のP2～P6に掲載されています。

初懐紙披講風景

●今後の予定

・第百二十五回例会
平成二十五年藤祭正式俳諧興行・二十韻実作会
四月二十三日（火曜日）
十二時～十七時（受付十一時より）
於　亀戸天神社

・第二十三回猫蓑同人会総会・歌仙実作会
六月十六日（日曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　新宿ワシントンホテル新館

・第百二十六回例会
平成二十五年度総会・歌仙実作会
七月十七日（水曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　江東区芭蕉記念館

・第百二十七回例会
芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作
十月十六日（水曜日）
於　江東区芭蕉記念館

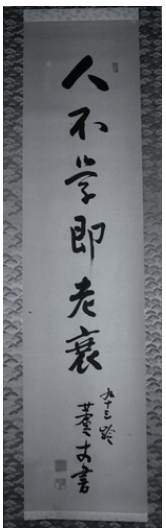
●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・天の川連句会様　平成二十五年二月　六千円
・山寺たつみ様　平成二十五年二月　五千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●寄贈

・根津旭雄様　平成二十五年一月
根津芦丈翁自筆掛軸「人不学即老衰」
九十三齢　蘆丈書　と署名落款
根津忠史丈に管理を委嘱



人学バザレバ即チ老衰ス

●受賞

・第二十一回岐阜県文芸祭連句部門・秀作賞
短歌行「中尊寺」の巻
鈴木了斎　捌
P7に掲載

●新会員

・名古屋富子　東京都千代田区在住
・松本　功　東京都文京区在住
・小山久子　大阪府堺市在住
・江津（ごうつ）ひろみ　東京都東久留米市在住

●住所変更

・間佐紀子　横浜市保土ヶ谷区へ転居

●各種募吟にふるってご応募ください

・第二十八回国民文化祭・やまなし２０１３文芸祭「連句の祭典」
形式：半歌仙
締切：平成二十五年五月十日
応募料：一巻につき二千円

・第二十二回岐阜県文芸祭連句部門
六月下旬頃に募集要項発表

詳細は猫蓑会内の各実作会などでお問い合わせ下さい。また猫蓑会オフィシャルサイトの「サイトマップ」ページに、「関連リンク」の「代表的な連句募吟」として各募吟サイトへのリンクを設置しています。応募用ファイルなどをネット上で公開し、メール添付で応募できる募吟もあります。

●猫蓑会オフィシャルサイト
http://www.neko-mino.org/index.html

季刊　『猫蓑通信』第九十一号
平成二十五年四月十五日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社